

60th Annual Meeting of American College of Sports Medicine における研究発表

前大純朗*

はじめに

今回、平成25年5月28日～6月1日の日程で、アメリカ合衆国インディアナポリスにて開催された60th Annual Meeting of American College of Sports Medicine（第60回アメリカスポーツ医学会大会：以下、ACSM）に参加し、「Muscular Activity During Maximal Voluntary Co-contraction in Bodybuilders（Maeo S, Takahashi T, Takai Y, Kanehisa H）」という研究テーマで、我々がこれまでに行ってきた研究成果の一部を発表する機会を頂いたので、学会大会の様子および私の発表内容について、ここに報告する。

ACSM について

ACSMは、約5万名の会員を擁し、体力・スポーツ医科学の専門分野において確固たる地位を築いている世界最大級の学術団体である。私は、昨年度初めてACSMの学術集会に参加したが、私がそれまでに国内で参加した学術集会との規模の違いに、強い衝撃を受けたことを鮮明に覚えている。それ以降、「毎年ACSMで研究発表をする」ということを、自身の目標としている。今回の第60回大会は、節目の年ということもあり、ACSMの本拠地であるインディアナポリスで開催された。サンフランシスコで開催された昨年度と比べると、参加人数は若干少なく感じたが、それでも約5千名が参加したという報告があり、やはり国内の学術集会とは比べられない程の規模の大きさであった。

学会大会では、昨年同様、一般発表に加え、各分野における著名な研究者のレクチャーやシンポ



講演会場の様子

ジウムなどの講演が、学会期間中、朝8:00～夕方6:00まで隙間なく行われていた。講演の聴衆の中には、スポーツ医科学を専門領域とする研究者や学生だけではなく、一般参加者と思われる高齢者も多くみられた。そのような方々は、午前の講演開始前から前列の席を確保していた。また、講演後の質疑応答の際にも、一般参加者による質問で既定の時間を超えてしまうという場面もあり、健康に対する一般参加者の意識の高さが窺え



午前の講演開始前の様子

* 鹿屋体育大学大学院体育学研究科・日本学術振興会特別研究員

た。

上述の講演に加え、早朝には「13th Annual Gisolfi: Fun Run/Walk」、夜には「International Reception」など、運動の場や研究者の多国間交流の機会も設けられていた。その中で、私は、「Meet the Expert: Networking Session」という、大学院生または学部生（100名限定）がスポーツ医科学領域の著名な研究者とランチを共にし、様々な質問および議論を行うセッションに参加した。著名研究者1名に対し学生6～7名の少人数のグループディスカッションであり、それぞれの研究領域や将来携わりたい職業などについて話し合った。私以外の学生は殆どが英語を母国語とするアメリカ人であり、やはり多少緊張したが、セッションの終わりに、「あなたぐらい英語ができれば、アメリカ（またはそれ以外の英語を公用語とする国）でも大きな問題なくやっていける」と、担当して頂いた著名研究者や他の参加者に言われ、安心すると同時に大きな自信となった。

研究発表について

私が今回発表した研究は、テーマが「Muscular Activity During Maximal Voluntary Co-contraction in Bodybuilders」であり、その内容は、我々がこれまでに報告してきた「拮抗する筋群の最大随意同時収縮を活用した筋力トレーニング」について、そのトレーニング強度の可塑性を調査したものであった。発表はポスター形式であったが、大学院生を始め多くの研究者から質問を受け、本研究の魅力や次の課題など、様々な点について話し合うことができた。また、その場で交わした議論やアイデアを元に、帰国後、データを様々な切り口から解釈しなおし、研究の質を改善した結果、その研究内容の一部が、海外の学術誌「PLOS ONE」に「Trainability of muscular activity level during maximal voluntary co-contraction: comparison between bodybuilders and nonathletes」というタイトルで掲載されることが先日決定した。今後も、早急に次の課題に取り組み、できるだけ多くの研

究成果を国際誌に公表したいと考えている。

終わりに

初めての国際学会発表で不安や緊張を感じた前回と違い、今回は、余裕を持って発表および議論を行うことができたと感じた。また、このような国際的な場における発表や議論を何度も経験してこそ、真の国際的な研究者が育つと私は思う。少なくとも、他国の研究者と交流する機会が少ない我々大学院生にとっては、このような場を一度経験すること自体が、研究者としての人生の大きな分岐点となる可能性がある。それゆえ、今後も今回のような国際的な研究交流の場へ参加出来るよう、研究活動により一層の努力をしたい。

最後に、本学会大会への参加および発表にご理解とご支援を頂いたことに、感謝の意を表します。